

国語科における指導の重点(身に付けさせたい力) ※学習指導要領に照らし合わせて

ア 知識及び技能	イ 思考力、判断力、表現力等
当該学年までに配当されている漢字を読んだり書いたりすることができる。	目的や意図に応じて、自分の考えが伝わるように文章を整えることができる。

児童・生徒の学力の状況(課題)	授業における具体的な手だて	成果検証(2月)
<p>第4学年</p> <p>ア 読み書きの習得率は個人差が大きく、文章の大部分をひらがなで占める児童が多い。</p> <p>イ 様々な語彙や技法を用いて文章を書くことができる児童がいる一方で、句読点や助詞の使い方が間違っている児童が多い。そのため文章を書くことに苦手意識がある。</p>	<p>ア 小テストの発展で、熟語や文章を書いたり、視写を通して正しい文章を学んだりする機会を増やす。</p> <p>イ 表現の技法がある文章を紹介したり、週に1度日記を書かせたりして、正しい文章の書き方を身に付けさせる。また、音読を繰り返し行うことで、手本となる文章を頭に入れ、書く時の参考になるように指導する。</p>	<p>ア 市学力調査【知識・技能】</p> <p>イ 市学力調査【思考・判断・表現】</p> <p>所見</p>
<p>第5学年</p> <p>ア 1割の正答率の児童から9割の正答率の児童まで、漢字の読み書きの正答率は、個人差が大きい。</p> <p>イ 自分の考えをもち、表現することに課題がある。主語・述語・修飾語等の文法を正しく理解し、文章に書き表す力に個人差がある。</p>	<p>ア 様々な教科を通して文章の中で漢字を使う経験を重ねたり、音読や黙読等、読む機会を意図的・計画的に増やしたりしていく。</p> <p>イ 文章全体の構成や展開が明確になっているかなど、文章に対する感想や意見を伝え合う機会を増やす。その中で、自他の文章の良いところを見つける活動を取り入れる。</p>	<p>ア 市学力調査【知識・技能】</p> <p>イ 市学力調査【思考・判断・表現】</p> <p>所見</p>
<p>第6学年</p> <p>ア 漢字の読み書きにおいて、当該学年までに習得すべき漢字に対する定着度に個人差が大きく、ほとんど書けない児童とほとんど書ける児童との間に大きな開きがある。</p> <p>イ 自分の考えを目的や意図に応じて文章にまとめる力において、文章構成や表現の工夫に大きな個人差があり、考えを的確に伝えられる児童と、伝えることが難しい児童との間に差が見られる。</p>	<p>ア 漢字の習得状況に応じた個別課題や補充プリントを活用し、書けない児童には繰り返し練習や視覚的に覚える活動を取り入れる。また、ペアやグループでの確認活動を通して、互いに学び合う機会を設け、漢字への関心と定着を促す。</p> <p>イ 文章構成の基本や表現の工夫についてモデル文を提示し、全体で構成や表現のポイントを共有する。さらに、段落ごとの書き方や接続語の使い方などを段階的に指導し、書いた文章を友達と読み合う活動を通して、自分の文章を客観的に見直す力を育てる。また、書く前の話し合いやメモ作りの時間を十分に確保し、考えを整理してから書く習慣を身に付けさせる。</p>	

■「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に向けた一人1台端末等 ICT の効果的な活用について	■学習の見通しをもたせることや学習を振り返ることの工夫等、「学びに向かう力」の育成に向けた取組について
<p>4年：調べて分かったことや考えたことを ICT によって書き出し、分類できるようにする。また、作成した文章を共有したり、修正しやすさを生かして推敲したりするために活用する。</p> <p>5年：他教科と関連させ、グループごとにテーマに沿った文章を共同で編集する中で、文章表現や内容を改善し、文章構成力や相手の意見を取り入れる柔軟性を身に付けさせる。</p> <p>6年：一人1台端末を活用し、児童が自分の考えを整理したり、調べた情報をもとに意見を深めたりする個別学習を行う。また、意見を共有する場面では、共同編集機能や画面共有を通して、互いの考えを比較し合い、よりよい表現や考え方を見つけ出す協働的な学習を取り入れることで、自分の考えを深める力や多様な考えを受け入れて再構成する力、情報を整理・活用する力を育てる。</p>	<p>4年：推敲前後での自分の変化が分かるような活動を設定する。児童から出た疑問や意見を共有したり、分類したりすることで、学びを自分事にし、活動に向かわせる。</p> <p>5年：毎時間の学習や自主学習を通して、学習の進捗や成果を可視化して振り返りを行うことで、学びに向かう力を育成する。</p> <p>6年：学習の始めに端末を使って本時のめあてや学習の流れを提示し、児童自身が目標を確認することで学習への見通しをもたせる。また、授業の終わりには振り返りフォームやデジタルポートフォリオを活用して、自分の学びを言語化させることで、児童が自ら学習の目標を意識し、達成度を客観的に捉える習慣が育ち、主体的に学びに向かう力や自己調整力の向上を図る。</p>

算数科・数学科における指導の重点(身に付けさせたい力) ※学習指導要領に照らし合わせて

ア 知識及び技能	イ 思考力、判断力、表現力等
整数、小数及び分数の性質を理解するとともに、それらの計算の意味について理解し、計算することができる。	数量の関係や問題場面の数量の関係などに着目して捉え、根拠を基に筋道立てて考えている。

	児童・生徒の学力の状況(課題)	授業における具体的な手だて	成果検証(2月)
第4学年	<p>ア 四則演算の計算方法の定着に個人差が見られる。</p> <p>イ 問題に対して根拠を元に筋道立てて説明することに苦手意識がある。</p>	<p>ア 授業の中の間隙時間に、復習する時間を多く設け、復習プリントボックスで苦手なプリントに継続的に取り組む。</p> <p>イ 苦手な児童には、問題文からどんな計算になるのかやどんな解答になるのかのヒントを視覚的に伝える。</p>	<p>ア 市学力調査【知識・技能】</p> <p>イ 市学力調査【思考・判断・表現】</p> <p>所見</p>
第5学年	<p>ア 数量や図形の知識・技能に個人差がある。</p> <p>イ 既習事項を生かして、問題の解決方法を考え説明することに苦手意識がある。</p>	<p>ア 授業のはじめに既習事項を復習する時間を設け、繰り返し学習を行う。苦手児童を中心に重点的に個別指導する。</p> <p>イ 授業の中でペア学習等を行い、自分の考えを伝えたり、相手の考えを聞いたりする場面を増やす。</p>	<p>ア 市学力調査【知識・技能】</p> <p>イ 市学力調査【思考・判断・表現】</p> <p>所見</p>
第6学年	<p>ア 既習事項が身につけていない児童が少なくない。</p> <p>イ 問題の読み取りや答えの根拠となる考えなどに苦手意識がある。</p>	<p>ア 単元に入る前に関連した既習問題を解いて、これから学ぶことのイメージを持たせる。</p> <p>イ 問題からヒントとなる場所に示すなど視覚的に提示する。また、交流の時間を設けて、友達の意見を聞き、苦手な児童の考えが浮かぶように支援する。</p>	

■「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に向けた一人1台端末等 ICT の効果的な活用について

4年: タブレット端末を用いて、e ライブラリや東京ベーシックドリル電子版に取り組みせ、自分の苦手な単元を復習させる。

5年: 授業の最後や自習の時間を設けて e ライブラリなどの復習アプリの活用やスカイメニューを活用した考えの共有を行う。

6年: 学習の後半で ICT 機器を活用して発展問題に取り組みせ、学習の個性化を図る。

■学習の見通しをもたせることや学習を振り返ることの工夫等、「学びに向かう力」の育成に向けた取組について

4年: 単元に入る前に既習事項を確認、復習をさせ、学習の見通しをもたせる。また、本時の振り返りを毎授業行い、次の授業に生かせるようにする。

5年: 学習課題を全体で確認し、その課題を解決するために自分で学習方法を工夫していくような活動を設定する。

6年: 単元前に既習事項を確認し、その定着を図ることで、思考のスタートラインを揃える。また振り返りから次の学びにつなげる。